

すみだ郷土文化資料館だより

MIYAKODORI

みやこどり

みやこどり(ゆりかもめ)は、
すみだを舞台にした和歌に登場するなど
墨田区にゆかりのある鳥です。

第37号 2012年(平成24年)4月発行

ふれあい話かゆり

すみだ

ふるさととの出会い、ときめきへの旅。

すみだ郷土文化資料館

131-0033 東京都墨田区向島二丁目3番5号

☎(03)5619-7034 ☎(03)3625-3431

電話番号は正確に。

http://www.city.sumida.lg.jp/sisetu_info/siryou/kyoudobunka/index.html

E-mail sumida-htm@city.sumida.lg.jp

■開館時間

午前9:00～午後5:00(入館は午後4:30まで)

■休館日

毎週月曜日(祝日に当たるときは翌日)

毎月第4火曜日(祝日に当たるときは翌日)

■観覧料

個人100円、団体(20人以上)80円、

中学生以下、身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・
精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方無料



三代豊国画「隅田川乃桜」弘化4年(1847)～嘉永5年(1852)頃

東京スカイツリー®開業記念年間特集展示

隅田川の情景 — 桜 —

会期：2012年4月1日(日)～6月10日(日)

すみだ郷土文化資料館では、「隅田川の情景」を主題とした、年間特集展示を開催いたします。

東京スカイツリー®開業の記念事業として年間を通して開催し、当館がこれまで収集・保管してきた絵画資料を中心に、未公開資料を含めて特別公開いたします。展示は、春夏秋冬の各時期に「桜」「花火」「絵巻」

「橋と渡し」の4テーマにわけて、順次、開催していきます。

最初のテーマは、現在でも多くの人びとに愛されている隅田川の桜です。浮世絵や石版画などの絵画資料から、江戸や明治の人びとが、どのように花見を楽しんできたのかを解説いたします。

展示記念講演会

「“つくられた”桜の名所
— 隅田堤と小金井 —

講師：工藤航平氏

(国文学資料館 研究部 機関研究員)

開催日 2012年5月20日(日)

時間 13:30～15:30

定員 先着40人

費用 300円(入館料込み)

申込み 4月1日午前9時から電話で
資料館へ



国芳画「偶田川の遠景」安政元年(1854)

■江戸時代の花見

墨堤(隅田川堤)の桜は、享保年間(1700-1800)に8代将軍吉宗の命によって木母寺から南に100本を植えたのが始まりとされ、その後、地域の人びとや粋人などによって植桜が進み、江戸時代後期には、「江戸第一の花の名所」(『江戸名所花暦』)として、江戸を代表する桜の名所の一つとなります。墨堤の桜が人気を集めた理由は、桜の本数が多いこと以外に、隅田川の清流に代表される景観が良いことに加え、浅草や吉原

などの歓楽地が近いことがあげられます。都会と郊外の楽しみが同時に楽しめることから、多くの人びとが集まり、その光景は絵師によって浮世絵などに描かれました。

浅草で儒学塾を開いていた寺門静軒が天保4年(1833)に記した『江戸繁昌記』には、堤上を手習いの師匠が弟子を大勢引き連れて花見を楽しむ様子が記されています。これは、寛政から幕末にかけて流行したもので、そろいの簪や手ぬぐいを付けた子供たちが、着飾った

師匠や親とともに墨堤を練り歩きました。この様子は『江戸名所図会』の挿絵に描かれています。

また、静軒は大家など勤める御殿女中が、仲間と共に連れ立って花見を楽しむ様子も記していますが、この華やかな光景も錦絵に描かれました。この他、芸者や花魁の花見などが錦絵の題材となりましたが、当時の花見が桜だけでなく、最先端の衣装に身を包んだこれらの人びとを見て楽しむ場でもあったことがうかがえます。

■明治時代の花見

江戸から明治へと時代が移っても、墨堤の花見の人気は衰えませんでした。明治31年(1898)に発行された『新撰東京名所図会』には「老幼相酔いて均しく紅顔ならざるはなく、絃歌興を鼓して、殆んど天楽を聞くが如し」とあり、お酒を飲んで歌い騒ぎながら花見を楽しむ様子が記されています。江戸時代から、鳴り物の演奏が禁止されていた上野とは異なり、酔って歌い騒ぐことが墨堤の花見の特徴でしたが、明治の錦絵には必ずといって良いほどこれらの酔漢の様子が描かれており、より酔漢の酔態が花



長谷川雪旦画「隅田川堤春景」『江戸名所図会』天保7年(1836)



山本松谷画「向嶋堤上観桜之図」『新撰東京名所図会 隅田堤上』挿絵、明治31年(1898)

見の風景に欠かせない光景になったことがうかがえます。

また、同資料には「明治の今日、突然として赤穂四十七士あぐうしじゅうしちしにあ偶ぐう爾にとして大津絵紙上おおつえの人にかい会ひす、是れ皆みな仮装かそうして至いたれるなり」とあり、仮装をして楽しむ人が多かったことが記されています。錦絵にも、女装して騒ぐ人など、様々な仮装をしている人が描かれ、当時の人びとが、現在のコスプレのように花見の場で仮装を楽しんでいたことがわかります。こうした習慣



三代広重画「東京開華名所図絵之内隅田堤より真乳山を望」明治15年(1882)

は、明治後期に規制を受けたため、それを知らずに仮装をして花見に来た人が交番で叱責を受ける光景がよく見られたそうです。

明治にはいると、それまで武家屋敷が建ち並んでいた本所周辺は工場地帯となり、多くの労働者が墨堤周辺に移り住むようになりました。この付近の工場や会社では、工員や社員が総出で花見に出かける観桜大会かんおうが催されましたが、花見舟を仕立てて皆で楽しむ人びとの姿が、錦絵に描かれています。

このような人びとが一齐に花見に出かけ、酔い騒ぐため、当然ながらトラブルも多発しました。このため、明治の錦絵には、酔漢を戒める警官の姿が頻繁に描かれています。平出鏗二郎ひらでこうじろうが書いた『東京風俗志』には「明治三十三年四月十五日の日曜日向島にて警察官の厄介めいていしやとなりし者、酩酊者二百五人、喧嘩九十六件、内負傷者六人、違警罪一人、迷子十四人と聞く。雑踏狼藉ざつとうろうぜきの状察すべし」と記され、大変な騒ぎであったことがうかがえます。警官と酔漢のやりとりもまた、明治時代の墨堤の花見には欠かせない一風景であったといえるでしょう。

■花見とレガッタ

明治末年頃の錦絵や石版画には、隅田川上のボートと、漕ぎ手に声援を送る人びとの姿が多く描かれています。明治15年(1882)に行われた、海軍の競漕きょうそう会を契機として盛んになった隅田川のレガッタは、桜の見頃である3月の下旬から4月にかけて、各大学や企業による試合が行われたため、桜とともにレガッタを観戦しようとする人々が墨堤に集まりました。なかでも人気のあったのが、明治20年(1887)に向島むいこに艇庫を構えた東京帝国大学(現、東京大学)の学内レースで、東京市中の学生や女学生が墨堤に押し寄せたといわれています。

当時の花見の様子を、『万朝報』の記者であった若槻紫蘭わかつきしらんは、「四月に入ると、枕橋から千住まで一里ばかりの間、紅の雲のトンネル行けども尽きぬ中を、一寸の隙間もなく人と人の流れが左と右とを揉まれ(中略)押されて進んで行く。そしてその間を時々ズドンと音がしては、水の上ではボートレースが行われる。堤の上から花見る人が少し早はやそうなボートを見ては白よ赤よとは離し立てる。花の向島はこうしてボートレースのひとしお為に一の賑わいを加える」(『東京年中行事』)と記しており、レガッタが当時の花見の風景に欠かせないものであったことがわかります。

(専門員 西村 健)



黒木半之助画「向嶋隅田堤桜花満開之光景(部分)」明治45年(1912)

年間特集展示「隅田川の情景」案内

年間特集展示「隅田川の情景」は、今後「花火」「絵巻」「橋と渡し」をテーマとして順次展示会を開催します。展示では、隅田川とその流域の情景を描いた近世・近代の絵画を丹念に読み込み、絵が描かれた時代に「隅田川という場」がどのような役割を果たしていたのかについて、具体的に明らかにしていきます。資料を通じて、隅田川周辺の歴史と文化の奥深さを感じていただければ幸いです。

「隅田川の情景—花火—」 会期：2012年6月23日(土)～9月2日(日)



貞秀画「東都両国ばし夏景色」安政6年(1859)

「隅田川の情景—絵巻—」 会期：2012年9月15日(土)～12月2日(日)



うめわかごんげんご縁起
「梅若権現御縁起」延宝7年(1679)木母寺所蔵資料

「隅田川の情景—橋と渡し—」 会期：2012年12月15日(土)～2013年2月24日(日)



国芳画「安政乙卯十一月廿三日両国橋渡初之図」安政2年(1855)